

ABB TODAY

NEWSLETTER OF THE ABB GROUP 2004 No. 3



ABB グループの最新情報をお届けするニュースレター



MESSAGE FROM STEFAN RANSTRAND

最先端の電力機器を One Team でお届けします



PROJECT NEWS

世界最大の LNG プラントを支える ABB の国際チーム



ABB Yesterday

ABB の HVDC が東西日本の電力連系を実現

www.abb.co.jp

最先端の電力機器を One Team でお届けします MESSAGE **3**

副社長兼パワーテクノロジー部門長 ステファン・ランストランド

世界最大の LNG プラントを支える ABB の国際チーム PROJECT NEWS **4**

ロシア「サハリン2」プロジェクト

ABB の HVDC が東西日本の電力連系を実現 NEWS **6**

ABB ニュース&レポート NEWS AND REPORT **7**

ABB は世界 100 カ国にネットワークを展開する電力とオートメーション技術のリーディングカンパニーです。環境への負荷を最低限に抑えながら、業務効率を最適化するソリューションの数々を、産業界と公益事業のお客さまにご提供しています。

ABB 株式会社からのお知らせ

MSA 株式会社を設立:アレスタ(避雷器)事業を日本で展開



ABB 株式会社は 2004 年 4 月、株式会社明電舎と合併で MSA 株式会社を創立しました。ABB が誇る世界トップクラスのポリマー型アレスタ技術と、明電舎が持つ国内アレスタ市場における豊富な実績という両社の強みを活かして、日本市場で事業を展開いたします。

ABB がポリマー形アレスタ技術のライセンスを MSA に提供し、MSA が製品の開発、製造、販売を行います。また、資材購入、研究・開発についても ABB と明電舎が共同で取り組み、技術、価格、品揃えなどあらゆる面で市場競争力を強化します。国内トップシェアをめざすと同時に、国際競争力の強化を図る所存でございます。

どうぞ愛顧を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

MSA 株式会社
〒410-8588 静岡県沼津市東間門字上中溝 515 番地
Tel: 055-929-4300 (代) Fax: 055-929-4399



© 2004 ABB, All rights reserved

ABB TODAY

NEWSLETTER OF THE ABB GROUP 2004 No. 3

ABB 株式会社

〒150-8512 東京都渋谷区桜丘町 26-1 セルリアンタワー
Tel: 03-5784-6254 Fax: 03-5784-6274
e-mail: bs.communications@jp.abb.com
www.abb.co.jp

発行人: ABB 株式会社広報部
編集制作: ネクストインク株式会社



表紙の写真

HVDC (高圧直流) 送電用サイリスタバルブ

ABB が世界で初めて 1954 年に実用化した HVDC (高圧直流) 送電。ABB は今もこの分野で世界をリードしています。ABB は中国国内で 2 プロジェクトを担当し、内陸部の豊富な水力資源による電力を、沿海部の需要地に無駄なく送り届けています。写真は中国の HVDC プロジェクトで設置したサイリスタバルブ。ABB ならではのハイテクノロジーを象徴する近未来的なフォルムです。

「ABB Today」の定期購読をご希望の方は、ABB 株式会社広報部まで電子メールまたはファクスでお申し込みください。

New ABB in Japan Manager



ステファン・ランストランド

最先端の電力機器を One Team
でお届けします

ステファン・ランストランド 副社長兼パワーテクノロジー部門長

「私たちの組織はお客さまに明確なメッセージを送っていると思います」と語るステファン・ランストランド。「ABBにはオートメーションテクノロジーとパワーテクノロジーという二つの基幹ディビジョンがあり、それぞれの業界で世界のトップという格付けをされています。この強さと明快さに、グループレベルの強力で一貫したマネジメントを組み合わせることで、お客さまからの信頼を築き、ABBが不可欠なパートナーだという認知度を高めていきます」とランストランドは抱負を述べています。

ABB株式会社は1月1日付の機構改革で、会社組織を簡素化・効率化するとともに、意思決定の迅速化と責任分担の明確化を行いました。ランストランドはこの機構改革に伴って来日し、現在の役職に就任しました。ABBのパワーテクノロジー分野で勤務を開始した1991年以来、ランストランドはすでにかなりの時間をアジアで過ごしています。1996年から1998年までは中国・廈門のABB Medium Voltage社に勤務。さらにクアラルンプールでMedium Voltage分野におけるアジア・大洋州地区のマネジャーを務めました。

ランストランドには、パワーテクノロジー部門が日本で達成すべき明確な目標があります。「日本におけるABBのマーケットシェアを高め、選ばれるパートナーになりたいと考えています。国内の地歩をさらに固めてより多くのお客さまにご愛顧いただくようにすべきです」

ランストランドは「ABB One Team」というコンセプト——すなわち「お客さまにひとつの窓口を提供するために団結する」というABBグループのコンセプトを、ABBジャパンの全体にも拡大したいと述べています。「ABBイコール『オートメーションテクノロジー』+『パワーテクノロジー』」なのです。内部の連携強化により、同じ担当者がすべての製品のご案内をすることによって、ABBが対応できる範囲を拡大することができます。例えば、予算規模500万～1000万米ドルのプロジェクトに私たちが参加することになったとしましょう。ABBの製品、システム、サービス、ソリューションがどれだけ幅広いのか、その種類がどれだけ豊富かを、ひとつの窓口からご案内

内できれば、ビジネスの速度やコスト効率、さらに安心感といった面からもお客さまに多くの価値を提供することができるのです。こうしたプロジェクトの進め方は、製造プラントやオイル・ガスプラント、発電所などでどんどん可能性を広げていきます」

ABBグループの中で「ABBジャパンの存在感は数年前よりもずっと高くなっている」とランストランドは述べています。「日本市場に対するグループの関心とサポートは格段に高まっており、ひとつの方向性として定着しつつあります。ABBグループは、日本市場の巨大さと重要性を理解するようになりました。当然のことです。なぜなら、トヨタのような多国籍企業や世界的な一流メーカー、業界で重要な役割を担うEPCエンジニアリング企業、商社などが存在するのですから。過去の経済的な困難を乗り越えて、成長に必要な投資を今こそすべきだという気分が日本では広がっています。お客さまの競争力向上のために貢献できる私たちにとって、絶好のチャンスなのです」

ABBのテクノロジーの中で、日本にとって特に大きな可能性を秘めているのはどれか？という質問に対して、ランストランドはより大きな観点からこう答えています。「ABBが提供する製品・サービス全体を視野に入れるべきだと思います。電力・産業分野のほとんどをカバーする私たちの製品ラインナップに、除外していいものはありません。お客さまが欲しいと思われるものはすべて揃っています。他社にはこれほど広範かつ先進的なテク

ノロジーはありません。投資するならば、過去に対してではなく未来に対してすべきだとお客さまによく申し上げます。20年前のテクノロジーに基づく製品を購入し、その製品寿命が30年なら、保有するテクノロジーはたちまち時代遅れなものになってしまいます。ABBならそんなことはありません」

成長に必要な投資を今こそすべきだという気分が日本では広がっています。お客さまの競争力向上のために貢献できる私たちにとって、絶好のチャンスなのです

ABBが世界各地に拠点を持っていることも、ABBならではの強みだとランストランドは言います。「ABBのスタッフは世界中のことを知っており、各地の言語や文化にも精通しています。このため、世界中に工場を持つグローバルな製品力を発揮し、さらに現地での卓越したエンジニアリング力やサービス力と組み合わせることができるのです」

ABBジャパンのパワーテクノロジー部門は事業体制をよりいっそう拡充し、最新のテクノロジーによるABBの製品、システム、サービス、ソリューションを日本企業のお客さまにお届けしてまいります。変わらぬご愛顧を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

ステファン・ランストランド (Stefan Ranstrand)

1960年スウェーデン生まれ。リンショーピン工科大学（スウェーデン）、ダルムスタッド工科大学（ドイツ）で生産技術・生産管理を専攻。イクア社などを経て、1991年にABBスウェーデンに入社。中国、チェコ、マレーシアのABBに勤務した後、2004年よりABB株式会社副社長兼パワーテクノロジー部門長に就任。



Sakhalin 2 Project

写真はイメージで同プロジェクトとは関係ありません

PROJECT NEWS

世界最大の LNG プラントを支える ABB の国際チーム

ロシア「サハリン 2」プロジェクト

ABB は最先端のテクノロジーを駆使した製品、システム、サービス、ソリューションを数多くの産業分野で提供し、そのほとんどでトップメーカーとして業界をリードしています。しかし、ABB の「強み」はそれだけではありません。ABB は 100 カ国に約 12 万人のスタッフを擁し、世界中のどこでも母国のように活動することができます。卓越したソリューションの提供はもちろん、顧客の言語と文化にも精通している有能なスタッフたちこそ、ABB が誇るもうひとつの「強み」なのです。

ABB ジャパンも、まさにこうした強みを持っています。ロシア最大の国際協プロジェクトにして世界最大の液化天然ガス (LNG) 処理プラント「サハリン 2」で、世界各国の ABB によって構成する国際チームを率いるのが ABB ジャパンなのです。2003 年末、日本の ABB 株式会社は総額約 1500 万ユーロの契約を獲得しました。契約内容は、配電システム一式 (変圧器、中・低電圧配電盤、電気制御システム) とプラントで使用する低圧モーターと可変速ドライブを供給するというもの。設計がすでに完了し、サハリンでは実際の建設作業が本格的に進む中、ABB 株式会社は追加で 2 億円の契約を獲得。この巨大プラント用に通信とセ

キュリティの完全なパッケージを提供することにもなりました。

ABB ジャパンがグループの窓口

サハリン 2 プロジェクトにおける ABB 株式会社の直接のお客さまは、エンジニアリング企業の ChiyoTec (チヨテック) であり、エンドユーザーはシェル・三井物産・三菱商事がそれぞれ 55%・25%・20% 出資した合弁会社です。製品はオーストラリア、チェコ、フィンランド、ドイツ、マレーシア、オランダ、英国といった世界中の ABB の工場や事業所が供給します。製品の

エンジニアリングや製造は行わないにもかかわらず、ABB 株式会社が契約を獲得することができた大きな要因は、こうした要素をすべて取りまとめ、最良のサービスを提供する能力があると認められたことです。「私たちが受注できたのは、熱心なプロの国際チームを投入して、クライアントに充実したサポートを提供できたからです」と ABB 株式会社の副社長兼 プロセスオートメーション部門長であるヒュー・クレイトンは言います。「事業部門の垣根と国境を超え、ABB グループとして取り組みました。クライアントの信頼を勝ち取ることができたのは、ABB 株式会社という単一の窓口を通じて ABB のグローバルな能力

を提供し、どんな問い合わせにも素早く回答したからです」

成功のカギは信頼関係

ABB 株式会社のプロセスインダストリー部プロジェクトサービスのエンジニア、オレグ・クドゥリャツェフはこう話します。「今回は私たちがエンジニアリングこそ行いませんが、大きな付加価値をお客さまに提供します。このような大規模プロジェクトでは、契約上の数値や仕様を離れたところで細かいことがいろいろ発生しがちなものです。国内と現地のニーズを満たすために、変更したり精緻（ち）化したりしなければならぬ詳細事項が必ずあります。契約は一日で締結しますが、設計とエンジニアリングは何年も続きますから。海外の工場とのやりとりを含め、すべてを電話だけで解決するのは不可能です。顧客のもとに直接出向き、実際に会って問題を話し合う者がいなければなりません。技術的に大きな問題が発生したらエンジニアにも参加してもらい、問題の解決と一緒に取り組むこともできます。人と人の信頼関係こそ、最も大事な成功要因なのです」

クドゥリャツェフはロシア人ですが、母国語を駆使する機会はまださほど多くありません。「一日の半分は英語を使い、半分は日本語を使っています（笑）。ロシアからの調達がようやく始まったところで、ロシア語で書かれた書類や契約書を点検

する機会も少し出てきました。現地で顧客とともに過ごす時間が増えるようになれば、私のロシア語ももっと役立つようになるでしょう」

クリーンな LNG を安定供給

サハリン 2 プロジェクトがどれぐらいの規模なのか想像するのは難しいのですが、ヒントはありません。建設作業は始まったばかりなのに、作業員の規模はすでに 6000 人に達しているのです。これだけでも将来の規模の一端がうかがえます。このプロジェクトを通じて、サハリンの南端にふたつの生産施設を開発します。ひとつは主に油田で、付随的にガスも産出し、他方は基本的にはガス田で、石油も少量産出する予定です。両者を合わせた可採埋蔵量は、原油 10 億トン、天然ガス 5000 億立方メートル以上と見積もられています。後者は、世界全体が 1 年間に必要とする天然ガス量の 4 倍に相当します。2008 年の完成後は、ふたつの系列それぞれで年間 480 万トンの LNG を生産する計画です。プラントがサハリン島南端という日本に極めて近い場所に立地していることもあり、サハリン 2 が生産する天然ガスは、日本はもちろん、韓国・中国・台湾をはじめとする東アジア・太平洋地域にとって主要なクリーンエネルギー源となるでしょう。

「世界にはエネルギーが必要です。しかも、クリーンエネルギーへの需要が高まっています。天然ガスは現時点で最良のソリューションです。日本と韓国が使う LNG のほとんどは中東から来ており、一方、米国はアラスカやメキシコ湾の供給源に依存しています。ソ連崩壊後の改革を契機にシベリアの巨大なガス田が開放され、日本や韓国、中国南部、さらにカリフォルニアにも供給できるようになりました」（クレイトン）。

しかし、このクリーンなエネルギー



「サハリン 2」では海上プラットフォームから LNG を採掘します（写真はイメージで同プロジェクトとは関係ありません）

「プロジェクトの契約は一日で締結しますが、設計とエンジニアリングは何年も続きます。顧客のもとに直接出向き、実際に会って問題を話し合う者がいなければなりません」

ギー源をサハリンから運ぶのは簡単なことではありません。ガスを運ぶのにパイプラインが最も簡単な方法ですが、潜在的市場が海に向こうにある場合はそ

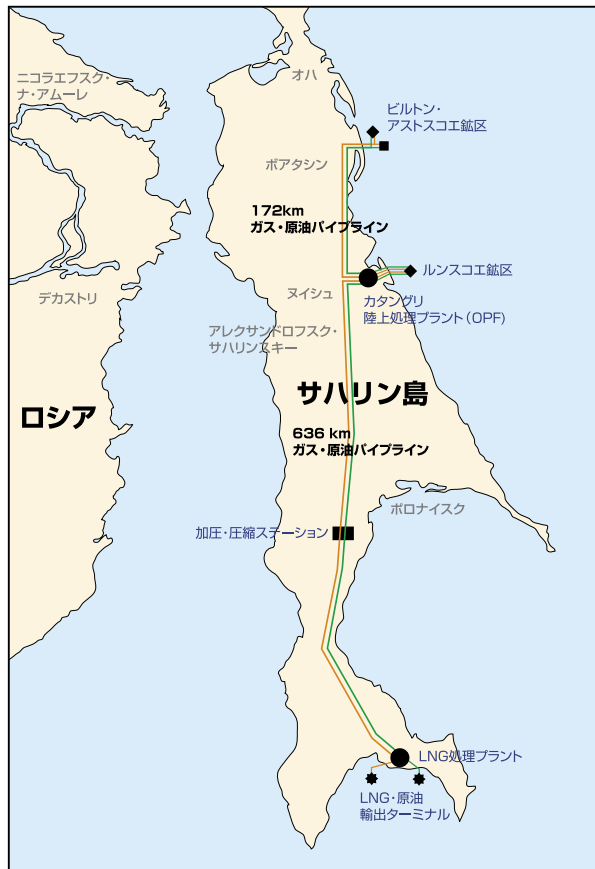
うは行きません。ガスはマイナス 160℃まで冷却することによって液化して体積が 600 分の 1 にまで減るので、通常気圧の下で LNG タンカーによる運搬が容易になります。

ワールドワイドな ABB だからできること

クレイトンとその部下たちはお客さまの期待に応えるべく奔（ほん）走した結果、団結力の強い国際的な ABB チームを結成することができました。「お客さまに対する透明性を確保すると同時に、ABB 内部でもこれまでにないほどのオープンさと信頼を確保できるよう努めました。それが契約獲得の決め手になったのです。オープンかつ迅速なコミュニケーションや最適な入札を通じ、一丸となって成功を目指すチームを作り上げることができました。実際、ABB の内部からもお客さまからも、こうしたやり方で今後も仕事をしていきたいという評価を得ています」（クレイトン）。

ABB 株式会社は近年、日本企業のお客さまと国外で協力することが多くなっています。このプロジェクトはまさにその好例です。ABB 株式会社は国際企業の日本法人として、単に製品の輸入業務を行っているわけではありません。日本のビジネス文化の中で仕事を進め、日本の顧客と日本語で緊密に連携しながら、最良のサービスを提供しています。ABB の「強み」とは、世界のどこで行われるプロジェクトであろうとも、現地で必要なあらゆる知識と経験を、業界トップの卓越したテクノロジーによる ABB 製品とともに、お客さまへ提供できることなのです。

（文中の敬称は省略させていただきました）



「サハリン 2」プロジェクト

ABB Yesterday

古くから日本で活躍してきた ABB の製品たち。その歩みをご紹介します。

Power Technology Special

PROJECT NEWS

ABB の HVDC が東西日本の電力連系を実現

そしてエンジニアたちもチームになった

ABB が世界で初めて 1954 年に実用化した HVDC（高圧直流）送電技術。今年はその 50 周年に当たり、ABB は 5 月 6 日に記念行事をスウェーデンで行いました。…遠い異国での話に聞こえるかもしれませんが、実はこの技術が 1960 年代の日本の電力系統にも大きな影響を与えたのです。そしてその陰には、ヨーロッパと日本の電気技術者たちのドラマがありました。



東京電力「電気の史料館」の水銀整流器



ゴットランド当時の HVDC の実験設備

北国の短い秋が終わろうとしている 1961 年（昭和 36 年）11 月、バルト海に浮かぶスウェーデンのゴットランド島に数人の日本人が降り立ちました。男たちは日本のトップクラスの電力技術陣による「両サイクル連系問題委員会」のメンバーです。スウェーデン本土とゴットランド島間で、ABB が世界初の実用化に成功した HVDC を調査するためにこの島を訪れました。

現在も日本では電気の周波数が、西日本は 60 ヘルツ、東日本は 50 ヘルツと異なります。このため東西間の電力の融通ができず、電気の「広域運営」の障害になっていました。HVDC は遠距離間の送電を効率よく行うのが当初の目的でした。しかし、日本の技術陣が目をつけたのは、高電圧大容量の交流電流を直流電流に変換し、再び交流に戻すという点です。再変換時に周波数を調整できるので、異周波数間の連系が可能になります。1961 年の調査団の報告を受けた日本の中央電気協議会は 1962 年、ABB の技術を導入し、東西の幹線が接する静岡県佐久間町に周波数変換所の設置を決めました。

「ほんの数人で日本の山奥に乗り込んでくるバイキングの末裔たちのたくましさに圧倒されながらも、『負けてはいられない』という気負いと自負

が私たちを仕事に駆り立てました」と変換所の建設当時に振り返る荒川文生さん（地球技術研究所所長）。大学を卒業して電源開発株式会社（現在の J パワー）に入社早々、荒川さんは現地へ派遣されました。J パワーの技術者たちは、スウェーデン

のエンジニアたちと時に協力し、時に激しい議論を戦わせながら機器の調整や試験を続けていました。当時の日本は外貨事

情が悪く、水銀整流器やその制御装置といった中心的な機器だけを購入し、残りは国産の製品を使う必要があったのです。製品の規格も、技術レベルも、設計思想も異なる電力機器を接続するという困難な作業を、技術者たちは現場で強いられることになりました。

荒川さんが特に印象深く覚えている ABB のエンジニアが「ハグレブあにい」と「ヤンセンじいさん」でした。若いハグレブは HVDC の独占的な技術を守るために、高レベルな技術アドバイスを求める J パワーの技術者たちに神経を尖らせていました。一方、「ヤンセンと私たちは、大工の棟梁と弟子…といった関係でした」と荒川さんは当時を語ります。制御機器を調整する最終段階ではスウェーデン

の技術者を長とする、日欧の「制御装置試験チーム」ができました。「現在のようにシミュレーターがあるわけではなく、アナログの制御機器を 31 台もある実機とつないで調整しなければいけません。膨大な作業を見かねて私たちが手伝っているうちに、自然とそんな雰囲気になってきましたね」。

こうした苦勞の末に変換所は 1965 年 10 月、運転開始にこぎつけました。HVDC にとっては世界で 5 番目のプロジェクトであり、異周波数連系を実現したのは初めてのケースです。建設や保守の要員として同変換所を担当した J パワーの技術者たちは、整流器にあだ名をつけて管理していました。「いつも調子がいい整流器は、ヤンセンさんの優等生という意味で『ヤンセン Jr.』。不審な動きをするものには、扱いづらいという意味で『ハグレブ Jr.』とかね（笑）」。

最先端の技術に携わる誇りを技術者たちは「佐久間周波数変換所の歌」に込めました。現在、J パワーの代表取締役副社長を務める中神尚男氏が作曲し、荒川さんが作詞したこの歌を、技術者たちは胸を張って歌ったそうです。

水銀整流器はその後の高度経済成長期の電力を支え続け、1992 年に老朽化のため日本製のサイリスタ整流器に置き換えられました。その一部が現在、東京電力の「電気の史料館」に展示されています。…水銀整流器が引退したちょうどそのころ、荒川さんは「ハグレブあにい」に再会しました。電力関係の国際シンポジウムでのことです。「ハグレブあにい」は ABB の送配電部門を代表するレナート・ハグレブであり、荒川さんは J パワーの技術陣を代表する技術開発部参事役。二人は 27 年ぶりに力強い握手を交わしました。

取材協力：地球技術研究所荒川文生所長、J-POWER（電源開発株式会社）

ABB 技術を搭載した電気自動車が地上世界最速に挑戦

最先端のパワーエレクトロニクス技術を活かした可変速ドライブシステムを ABB が供給し、プラチナスポンサーとなっている ABB e=motion カーが、地上世界最速の記録に挑戦します。記録に挑むのはイギリス人コンビ。ベテランエンジニアのコリン・ファロウズとドライバーのマーク・ニュービーです。

時速 300 マイル (480km) 達成を宣言している ABB e=motion には、ソーラーパワーを使って充電する 4 つの鉛電池が搭載される予定です。この電池は 600 ボルトの電流を DC 出力し、ABB ACS800 ドライブで変換した後、車の 2 つのモーターに供給します。ABB のダイレクトトルクコントロール技術が、モータートルクを最大限に制御し、時速ゼロの時から車の素早い加速を実現します。

現在の電気自動車の世界最速記録は、アメリカのレーシングチームによる時速 245 マイル (392km)。事前に行われたテスト走行では、世界記録を保持している車が 2 マイル (3.2km) で時速 139 マイル (222km) に達したところ、e=motion はわずか 1000 ヤード (900m) で時速 146 マイル (234km) に達しました。

ABB e=motion カーの設計者、コリン・ファロウズは以下のように語っています。「車の設計には、ABB の専門技術が不可欠でした。この車の卓越した性能の多くは、優秀な ABB エンジニアリングチームの力によるものです」

ABB の e=motion カーのスポンサーシップは、ABB が推進している環境保護活動の象徴です。ダウ・ジョーンズのサステイナビリティ・インデックス (DJSI) において、ABB は自社とその顧客の成長目標、および環境保護を同時に促進する「トリプルボトムライン」を達成している企業として、常にトップクラスの評価を得ています。



世界記録達成なるか？
ABB e=motion

インドの貧しい子供たちに明るい未来を

ABB はインドのバンガロールで、貧しい子供や字の読めない子供、幼い時期から労働を強いられている子供たちに、明るく、よりよい未来を築くチャンスを提供しています。ABB のオートメーション製品の工場があるバンガロールの産業地帯、ピーニャ郊外の国立小学校。ABB は、この小学校のインフラの整備、指導要綱の改善などを進めています。

ABB が支援活動を開始した 1994 年には、この小学校はコンクリートの床も、ベンチも、黒板やトイレさえないぼろぼろの部屋が 5 つあるだけの建物でした。それが現在では、2 階建ての建物にコンピュータールーム、独立した洗面所などを備えた設備の整った、立派な学校に生まれ変わりました。生徒数も 1995 年の 350 人 (6 歳から 12 歳まで) から、現在では 750 人にまで増加しています。

「ピーニャ小学校は、平均以下の貧しい家庭に生まれた多くの子供たちに、良質な教育を受けるチャンスを提供しています。この小学校の質は、私立小学校にも負けません」と、同小学校の教師、カリンガッパ・ラジャッパ先生は語ります。

同小学校では、月 3 ドルで 1 人の子供に 1 カ月分の給食が支給されるため、ABB の従業員たちは子供たちの「スポンサー」になっています。給食事業は、



生まれ変わった教室で勉強に励む子供たち

チャリティー・トラストに登録されている ABB インドファンデーションによって実現したものです。

さらに、学校の隣には ABB の支援による医療センターがあります。同センターは子供たちの健康管理だけではなく、遠路はるばるやって来る大勢の人々の診療に当たっています。ABB は医療セン

ターを通じ、NGO が行う健康診断、ワクチン注射プログラムやその他の予防医療活動を資金面で援助しています。

ABB は 1995 年以降、小学校やその給食事業、医療センター、地域環境のために、約 6 万ドルを援助してきました。

北京オリンピックのために中国を支援

中国政府は、2008 年に開催される北京オリンピックを訪れる観光客のために ABB に地下鉄システムの拡張に関する協力を要請しました。100km の線路を有する北京の地下鉄システムは、1200 万人の北京人口の約 10% 程度の搬送能力しかありません。都市計画の担当者たちは、北京オリンピック開催までにこの長さを 3 倍にする計画です。

北京メトログループ(北京市地鉄集団)は、西直門から東直門までを走る新型路面電車(LRT) * に、ABB の高電圧開閉装置を導入しました。同計画の主任兼シニアエンジニアのウー・ヨウヨウ氏は、大勢の人々を輸送する LRT に ABB 製品を採用したことに関し「ABB の技術は品質が良く信頼性が高いだけでなく、環境にもやさしいです」と、コメントしています。

同氏によると、北京では現在、8 本の地下鉄ラインが建設中、もしくは今年中に着工予定で、その中で ABB と共同で進めているラインが最も速いペースで建設が進んでいるそうです。

2003 年初頭には、ABB は広州のメトロライン 3 と深圳メトロライン 1 向けに、特高・超高電圧のガス絶縁開閉装置(GIS)、1800 万ドル分を受注しました。これは、特高・超高電圧では ABB 中国史上、最大規模の受注となりました。

* LRT (Light Rail Transit): 都市内の道路交通渋滞緩和と環境問題の解消を目的に、近年欧米の都市を中心に導入が進んでいる新交通システム。日本では「新型路面電車」、「軽快電車」などと訳されています。

ABB 株式会社 2003 年度業績のご報告 4 年連続で受注 10% 増を達成

ABB 株式会社の 2003 年度 (1 月 1 日から 12 月 31 日まで) の業績をご報告いたします。

受注金額は前年比 14% 増の 234 億円と、4 年連続で前年比 10% 以上の伸びを記録。売上は前年比 5% 増の 203 億円と好業績が継続しています。現在の ABB 株式会社としては初めて売上が 200 億円の大台に乗りました。

AT ディビジョンは各部門が前年度に続いて好調に推移したのに加え、PT ディビジョンが海外の大型案件を多数日本企業から受注したことが好業績に貢献しました。

ABB ジャパングループは 2004 年度も、ABB グループが誇る世界トップクラスの製品、システム、サービス、ソリューションを日本のお客さまに提供し、より高い付加価値を生み出すビジネスをお客さまと共に構築して参ります。今後とも、ABB 株式会社および ABB ジャパングループに、変わらぬご愛顧、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

音声、データ、保護信号の 総合通信ネットワーク



電力、鉄道業界向け電力保安通信設備

ABBは電力技術における世界のリーディングカンパニーです。電力事業・鉄道業界のお客さま向けに、ますます広域化・複雑化する電力系統を安定的かつ効率的に運用する総合的な通信ネットワークのソリューションをお届けいたします。

Applications

Power System Control, Power Line Protection, Operational Telephone Services,
LAN Interconnections, Video Surveillance, Remote Diagnostics & Support,
Distribution Automation, Standard Telephone Services

Solutions

Optical Networks, Access Multiplexer, Radio Relay Systems, Power Line Carrier (PLC), Teleprotection,
Data Networking / CCNS, Voice Communication Systems, Network Management

www.abb.co.jp

www.abb.com/utilitycommunications